

発表会に何をやる？

- 《やさしい子ども》 自分の思いや考えを伝え合い、互いのよさを感じながら遊びを進めようとする。
 友達とイメージや考え、方法を具体的に伝え合いながらかかわろうとする。
- 《考える子ども》 友達とかかわり、相手の思いや動きに応じながら、遊びや生活をつくり出し楽しむ。
 ～花巻市立花巻幼稚園～

☆ 園生活3年間の経験内容（教育課程・指導計画抜粋） ☆

毎年12月上旬に恒例で行われる園行事のひとつ『発表会』に向けての劇遊びに視点をあいた満4歳・4歳児・5歳児それぞれの経験内容は以下のとおりである。

- ＜満4歳＞・言葉の繰り返しの場面を、教師と一緒に役になって動いたり話したりすることを楽しむ。
- ＜4歳児＞・言葉の繰り返しの楽しさに心を動かし、様々な役になって自分なりに動いたり話したりすることを楽しむ。
- ＜5歳児＞・発表会に向かってお互いにイメージや考え、思いを出し合い、工夫しながら友達と作り上げていくことを楽しむ。

10月末、発表会に向けて5歳児学年ミーティング（担任・サポート講師・副園長）を行った。「クラスで3つの劇ができれば…クラスの数から劇が3つだと1つの劇が7～9人。この人数なら互いのイメージや考え、思いを出し合って劇を作り上げる体験を積み重ねられるのではないか」「様々な文化に親しめるよう、また、一人一人のよさが引き出されるよう、和と洋等、様々な作品で進めていけるような援助を工夫しよう」という話し合いがなされた。

☆ 具体的な事例 ☆

子どもの姿・子ども同士のかかわり	保育者の援助・視点
11月中旬、「びゅんびゅんごま」をクラスの皆が回せた記念にお家の人たちにも見せることになり、下旬に「びゅんびゅんごま発表会」を開催。そのきっかけとなった「びゅんびゅんごまがまわったら」という絵本を自分達で持ってきて、発表会に劇にしたいという子どもたちが集まった。	担任は、クラスの子どもたちとどのような劇をしたいのか話し合う場を設定した。クラスの実態や子どもたちの興味関心を考慮し、さりげなく数冊の絵本を並べていた。「びゅんびゅんごまがまわったら」は自分達で絵本の棚から探し出し、保育室に持ってきた。数人でその絵本を囲み、あらすじや登場人物等、話し合いが始まる。子どもたちがそれほどまでに友達と夢中になって取り組んだことが楽しかったのだと実感した。

子どもの姿・子ども同士のかかわり	保育者の援助・視点
「校長先生になりたい！」「オー！似合う」「俺は〇〇！」「いいね、いいね」「あれ～2つは回せるけど、3つは無理！」「よし！練習しよう」…この劇をやりたいと集まった子どもたちがみんなでびゅんびゅんごまの練習を始める。 数日たって3つ同時に回すことは難しいという現実と直面し、話し合いが始まった。「回せないと劇は無理だよ」「2つにしたら！」「そんな簡単なものは駄目だよ」…「どうする…」「どうしよう…」…「ねえねえ、このお話『まんじゅうこわい』なら俺たちで出来そうじゃない？」「いいね～これ、面白いよね」「俺もこの本好き！」「残念だけど、このお話なら俺たち出来そうだからこっちにしよう！」	子どもたちの実現したい思いを受け止めながら、劇にするには難しいという場面をどう工夫していくか、課題を乗り越えたい思いを支えていくという援助と並行し、メンバー（支援児が数人）を考慮し、子どもたちが自分達から方向を転換できそうと思えるように支えていく援助も伏線としてもってかかわっていった。

子どもの姿・子ども同士のかかわり	保育者の援助・視点
「まんじゅうこわい」の絵本を囲んで役決めが始まる。「まっつあんは誰がする？」「3人も？」「でもどうしてもやりたいんだよね」「あ！じゃあ、俺は違う役でもいいよ」「ほんとか？」「いいの？！ありがとう！」「じゃあ今日は、まっつあんを2人でやってみよう」「よし！始めるよ」「副園長先生も見に来てください！」…「〇〇君、昨日より話すの上手い！」「難しいから家で練習した」「凄い！」「まっつあんって話すの、いっぱいだな…」とやってみて悩む子もいる。	子どもたちが自分達で決断し、新たな目的を見出し、進めようとしている姿を温かく見守る。子どもたちが演じる様子を見ながら、「こんな音はどう？」「その話し方、面白いね」「そこ、みんなで揃えらるともっと面白くなるね」等とアドバイスする。観客になった副園長も「いいねえ、面白い！」と工夫している動きや話し方を認め、更に「このお話は落語のお話だから、お客さんを思い切り笑わせようね」と、工夫を引き出す言葉をかける。

☆ 接続期の指導場面における配慮事項 ☆

- 発表会までの過程において満4歳、4歳児での「発表会が、劇遊びが、楽しかった」という経験から「またやりたい！」「もっとやりたい！」という意欲が育っていることで、5歳児では「こんなことをしてみたい」「こういうイメージにしたい」と友達同士で言い合える状況が可能となる。教師が前面に出てリードを取る指導ではなく、「一人一人の状況をキャッチしながら、仲間の中で自己発揮したくなる状況を作っていくこと」「それぞれの体験の意味を読み取り、タイミングを図って援助していくこと」に配慮している。